

Title	カタロニア語の関係詞について（1）
Author(s)	長谷川, 信弥
Citation	Estudios Hispánicos. 1997, 21, p. 45-55
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/97934
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

カタロニア語の関係詞について (1)

長谷川 信弥

1. はじめに

本稿の目的は、カタロニア語の関係詞(*els relatius*)の記述にある。今回から数回にわたり、網羅的な記述を試みたいと思う。

他のロマンス諸語同様、カタロニア語でも一般に、関係詞によって形成される従属節は関係節と呼ばれていて、その用法から名詞的用法、形容詞的用法、副詞的用法に分けられる。また、関係詞の省略ができないことや、定冠詞を伴う関係詞があることなど、英語とは異なるロマンス語一般の共通点も有する。そこで今回はまず、関係詞についての従来からの記述をあらためて確認することから始める。つまり、Pompeu Fabraの記述と、それに対する補足的な記述、最近の規範的文法書と認められるBadia i Margaritのそれなどを比較する。そして、そのなかから問題となる点を拾い出していくが、今回はまず疑問詞*quin*の関係詞としての誤用を検討する。この際、スペイン語(カスティリア語)の関係詞と比較し、カタロニア語の記述に際して無視することのできないスペイン語(カスティリア語)の影響をみながら、不正確である、または好まれない表現であると考えられている例を検討していく。

2. 従来からの記述

まず、現代のカタロニア語の規範の確立に大きく貢献したPompeu Fabra(1981, pp.92-96)で規定されている関係詞をあげ、その基本的用法を簡潔にまとめる。Fabraは、*que, què, qui*を関係代名詞(*els pronoms relatius*)¹⁾、代名詞的な用法を帯びた定冠詞と複合的な形式をとる*el qual*を複合関係代名詞(*el relatiu compost*) (以下、*el qual*で代表させる)、*on*を場所(所格)の関係詞(*el [pronom] locatiu*)としている。²⁾用語の差異はあっても、その後の文法

書の大多数でも、おおむねこれに倣う記述がおこなわれているので、それらであげられている例文も適時引用する。また、様態の副詞comを関係詞にあげているものもごく少数ながらみられる。例えばMartí i Castell(1986)のように、このonとcomに加えて、quanも関係副詞に入れるべきだという立場に立つものもある。これに関しては、続編で取りあげる。

2. 1. que

queは関係代名詞のなかで唯一の弱勢語で、また不変化で、³⁾ 先行詞に人も物もとることができ、主格・目的格のどちらにも使える(1)(2)。しかし、前置詞を伴うことができず、その場合、先行詞の有生性によってquiまたはquèが用いられなければならない。queはいわゆる制限的用法でも、非制限的(説明的)用法でも用いられる。また、副詞的に用いられ、時を表す先行詞をとることや(3)、属辞(atribut)としての用法もある(4)。⁴⁾ 一般に関係節内の動詞は定形をとることが本来的で、このqueの誤用を検討する際にも述べるが、スペイン語のような、不定詞を従えたnada que hacerの形を取ることとはできず、前置詞 a を用いた res a fer としなければならない。しかし実際には、*res que ferもみられる。

(1) L'home que ha vingut m'ha portat una lletra d'en Jordi.

[主格, 先行詞: 人(l'home), 制限用法]

(やって来たその人は、ジョルディからの手紙を持ってきてくれた)

(2) Deixa'm el llibre que llegies.

[目的格, 先行詞: 物(el llibre), 制限用法]

(君の読んでいたその本を僕に貸してくれ)

(3) El dia que vindràs els trobaràs a casa.

(君が来る日には、家で彼らに会うだろう)

(4) El Lluís ja no és l'home il·lusionat que era l'any passat.

(リュイスは、もう去年の楽しい男ではない)

後述するように、この関係詞については誤用の指摘が多い。それは、この関係詞がもっとも多用されていることを示していると考えられるが、その頻度については後述する。また、誤用としてのel queとそうでないものに

についてもその際に検討する。

2. 2. qui, què

これらは前置詞を伴い、先行詞が人（または擬人化された物）であれば quiが用いられ(5)、物であればquèが選択される(6)。ともに、制限用法、非制限用法の両方に用いられる。また、ともに不変化である。quiは独立用法としても用いられる。

(5) L'home amb qui anaves aquest matí, m'ha vingut a trobar aquesta tarda.

(君が今朝一緒に歩いていた人が、午後私に会いに来た)

(6) El martell amb què hem clavat els claus, on l'has posat?

(私達が釘を打っていた金槌は、どこにおいたの?)

これら二つの形式と共に共起可能な前置詞は、Cuenca(1991)によれば、a, de, en, amb, per, per a の6つであり、これらはいわゆる弱勢の前置詞である。また、Fabra(1981)では、強勢のある前置詞、前置詞句、名詞、動詞（現在分詞）のあとには、後述するel qualのみが用いられるとしている。⁵⁾

2. 3. el qual (la qual, els quals, les quals)

この関係詞は、qual単独では用いられず、先行詞の性と数に一致した定冠詞el (男性単数), la (女性単数), els (男性複数), les (女性複数)のいずれかを必ずともない、それ自身、複数の先行詞に対してはqualsとなる。制限用法では前置詞をともなった場合にのみ用いることができ(7)、非制限用法では前置詞をともなわなくても用いられ、主格でも(8)、目的格でも用いられる。人も物も先行詞とすることができる。また、この形式は、より教養のある書き言葉、文語的な使用に向いたものであり、口語での使用はqueに比べ、その頻度は低いとされている。

(7) És una màquina a la qual caldria fer moltes reparacions.

(それは、多くの修理が必要であろう機械だ)

(8) *Són qüestions importantíssimes, les quals caldria estudiar detingudament.*

(とても重要な問題で、慎重に検討する必要がある)

この *el qual* は、弱勢の前置詞にも用いることができるので、(7)の *la qual* は *què* に置換可能であるが、*qui* と *què* が使えない場合、つまり上述の5つの前置詞以外の前置詞の場合(9)、さらに前置詞句の場合(10)には *el qual* のみが用いられる。⁶⁾

(9) *Van demanar un ajut sense el qual no podrien començar el projecte.*

(彼らは、それなしではそのプロジェクトを始められそうにない、助けをもとめた)

(10) *Els articles a partir dels quals ha redactat el treball són tots en anglès.*

(それらの記事から報告書を作成したのだが、それらは全部、英語のものだ)

いわゆる関係形容詞としての *el qual* の用法についての Fabra の記述はなく、例文があげられているのみである。そこで、これを所有関係詞 (*el relatiu possessiu*) と呼んでいる Baulenas (1985, pp.406-407) の説明を要約する。それによると、スペイン語の *cuyo* の例(11)と違い、限定する語に *de* を介して後置し、先行詞に性数一致する(12)。それゆえに、これを関係形容詞とは呼んでいないのである。

(11) *Es la casa cuyas ventanas están abiertas.*

(12) *És la casa les finestres de la qual són obertes.*

(それは、窓のあいている家です) [*la qual* = *la casa*]

この例では、限定されている *les finestres* が関係節の前、つまり外に位置している点が特徴である。これまでみた関係詞が、(*el qu-* ではじまる語形を持っていることから、これらの語が関係節という補文の標識であるとい

う解釈を認めると、上記の場合では、el qualが補文の文頭になく、この解釈の障害となりうるが、Solà (1972)などでも指摘されている例が示すように、限定される語が逆に補文の末尾に位置する場合(13)や関係詞の直後に位置するもの(14)がみられることから、やはり補文標識として補文の文頭に位置する傾向を示す力が働いていて、この解釈を擁護していると考えられるのではないだろうか。

(13)Em parlà d'una persona, de la qual he oblidat el nom.

(=el nom de la qual he oblidat)

(彼は私にある人のことを話したが、その名前を忘れてしまった)

(14)Hem estat en un poble del qual les aigües són medicinals.

(= les aigües del qual)

(私達はある村にいたのだが、その水は薬効がある)

Badia i Margarit(1995, p.370)も指摘しているように、定冠詞をともない、先行詞との性数一致を義務的とするel qualの複雑さが、関係節内での統語的役割の多様性、すなわち主語、目的語として、あるいは状況補語としても機能するという汎用性とあいまって、口語体でのこの形式の忌避につながっていると考えられる。このことは上記の傾向を認めることへの反例とはならないであろう。また、Solà (1972, p.119)は、この構文を他のロマンス語のそれと比較している。それによると、たとえばスペイン語のcuyoの文では、先行詞(A)と関係詞の構造は[A + cuyo + N] (cuyoがNに性数一致)と単純で、フランス語や英語でも関係詞(dont, whose)は不変化ながらスペイン語と同じ構造になっているのに対し、カタロニア語では、[A + art + N + de art qual] (art=article)となり、句(sintagma)を形成しないAとart + Nとの接触が統語的な硬さと韻律的な曖昧さを生み、この構文の成立を困難にしているという。これらから、後に述べる、より単純な構文の形成への傾向、quinの使用(誤用)が説明できることになろう。

また、その他の用法として、(15)のように、文学的な表現に限られるが、先行詞(または相当語句)を冗語的に繰り返すことによって成立する[N1..., el qual N1]の例も容認されている。

(15) **Barcelona té un equip de futbol que és el Barça, el qual equip es caracteritza per...**

(バルセロナにはバルサというサッカーチームがあり、このチームの特徴は....)

ここで、el qualはequipに性数一致していると考えられるが、これは Cuenca(1991, p.84)の例からも確認できる(16)(17)。後者の例は先行詞相当語句 (eines (工具)) である。

(16) **Tenim quatre milions de pessetes, les quals pessetes no són suficients per a comprar el pis.**

(私達は400万ペセタ持っているが、これはマンションを買うには十分ではない)

(17) **Hem fet servir martells, tenalles i alicates, les quals eines vam haver de comprar.**

(私達は、金づち、釘抜き、ペンチを使ったが、これらの工具は買わなくてはならなかったのだ)

さらに、Fabraは特に言及していないが、前文を先行詞として受ける la qual cosa(=cosa que)も多くの文法書で扱われていて、項目がたてられている場合が多いが、上記(17)の例の先行詞相当語句にあたる語がcosaで、これが固定したものと考えられることができるであろう(18)。この形式は、スペイン語のpor lo cualのように前置詞を伴うこともある(19)。⁷⁾ また、先行詞を持たず、それ自身が先行詞を内包する場合には、això queやallò queなどの形式が用いられる(20)。⁸⁾

(18) **Van tallar l'aigua, la qual cosa va obligar a tancar la piscina.**

(断水したので、プールを閉鎖せざるをえなかった)

(19) **L'aeroport està col·lapsat, per la qual cosa hi ha hagut retards importants.**

(空港は機能しておらず、これによって大幅な遅れが出た)

(20) Allò que em vas contar no és veritat.

(君が私に話してくれたことは、本当ではない)

2. 4. on

場所を表す先行詞をとる関係副詞と考えられているonは、al qualやen el qualに置換可能であるとFabraは述べているが、多くの文法書ではal qualではなく、en quèをあげるものが多い(21)。⁹⁾ また、deやperなどの前置詞を伴った場合もdel qual, pel qualなどに置換可能である。先行詞には、(21)のように名詞のほか、副詞(22)の場合や独立用法(23)も認められる。さらに、場所の意味が拡大して、概念的に場所に相当する語を先行詞とする例は豊富で(24)、前文を受ける場合(25)¹⁰⁾ やBaulenas(1985, p.408)の指摘する例(26)のように時間の表現にさえ用いられることもまれながらあるという。

(21) Ens trobarem a la casa on (=en què, en el qual) viuen els pares.

(両親の住んでいる家にいるだろう)

(22) Ens trobarem allí on viuen els pares.

(23) Ens trobarem on viuen els pares.

(24) Ensenya a la universitat on havia fet els estudis.

(彼は勉強していた大学で教えている[機関としての大学])

(25) La casa era buida, per on vàrem imaginar que s'havia mort l'àvia.

(その家は空き家だったので、私達はおばあさんが亡くなっていたのだと想像した)

(26) Arribà el dia on tot ens fou demanat.

(すべてが私達に求められる日が来た)

3. 疑問詞 quin の関係詞としての誤用

Fabraの時代から今日に至るまで、誤用であるとしてその使用が批判されている形式のひとつが、疑問詞quin (女性単数quina, 男性複数quins, 女性複数quines) の関係詞としての使用である。この形式は、基本的にqualに

取って替わったものであるとされている。はじめに、疑問詞としての用法を確認すると、これは代名詞として(27)、または形容詞的に用いられている(28)。

(27) Quines són les teves sabates?

(君の靴はどれだい?)

(28) Quin dia vindràs?

(何曜日に来るつもりかい?)

これらはそれぞれスペイン語では、cuálとquéに相当すると考えられる(29)(30)。

(29) ¿Cuáles son tus zapatos?

(30) ¿Qué día vas a venir?

地域的な変異を除外すると、今日のスペインでは、前者cuálはもっぱら代名詞としてのみ用いられていて、形容詞としてのquéと相補的であるが、カタロニア語では区別なくquinが用いられている。このように規範的には、qualはもっぱら関係詞であり、quinはもっぱら疑問詞である。次に誤用とされる例をみることにする。

Fabra(1937, pp.12-13)があげている例のうち、はじめの2文(31)(32)では、quines, quinaをそれぞれqualsとqualに置き換えるだけ、3つ目の文(33)では定冠詞を伴ったla qualに交換することによって正しい文が得られるとしている。しかし、スペイン語のcuyoに相当するquinが形容詞的に使われている文(34)では、このままqualに置き換えることはできず、[art. N del qual]の構文(35)にしなければならないとされる。

(31) Són comandes urgents, les quines convé servir.

(それは急な注文だが、応じるほうがよい) [quines→quals]

(32) Aquesta és la noia de la quina et parlava ara mateix.

(こちらが、いま君に話していた女の子ですよ) [quina→qual]

(33) Tothom s'indignà d'aquella supressió, quina supressió
afectava els interessos de tants de veïns.

(誰もがあの廃止に憤慨したが、その廃止は多くの住人の利益に影響を与えていた) [quina→la qual]

(34) És la casa quin propietari acaba de morir.

(これは、その家主が亡くなったばかりの家です)

(35) És la casa el propietari del qual acaba de morir.

例文(34)のquinをel qualに置き換えられないのは、そうすると非文となってしまうからで(36)、これは先にあげた例(16)(17)のような先行詞または相当語句の冗語的な繰り返しの構文とは異なるからである。

(36) *És la casa el qual propietari acaba de morir.

これらから指摘できること、つまり実際にquinを使った例(34)が観察されていることは、疑問詞quinが関係詞として流用または誤用されていて、el qualに対する何らかの抵抗があることを意味していると考えてよいのではないだろうか。さらにいくつかの記述をみると、Seguí i Trobat(1993, p.93)は、カタロニア文芸復興期 (renaixença) によく見られた語法で, cuyo, cuyaをquin, quinaと訳すこと(Traduir “cuyo”/“cuya” per quin, quina)は不正確なものであるとしている。つまり例文は(37)において, la paciènciaが節内の後方に移動し, (38)のようになり, このdel qualが不正確なquinaと交替するというものである(39)。

(37) Un senyor, la paciència del qual conec, és aquí.

(ある人, その人の忍耐を知っているのだが, ここにいる)

(38) Un senyor, del qual conec la paciència, és aquí.

(39) *Un senyor, quina paciència conec, és aquí.

この(37)から(38)への展開は, (13)(14)にみられたものと同じであり, 補文標識のel qualの関係節頭位への移動として説明されるであろう。このプロセスの正誤についてはさらなる検討が必要であろうが, el qualとquinの

交替は、ひとつにはqualが常に定冠詞をともなっていることが、定冠詞をともなわないcuyoからの直訳を妨げる一方で、それをともなわずに機能して関係詞として流用する条件のそろった疑問詞のquinをあてることが、スペイン語のcuyoの構文に相当する文を作り出すことを可能にしていると説明できるのではないだろうか。つまり、cuyoの意味機能の訳としては、qualもquinも可能であるが、他のいくつかの条件がquinの使用を可能にしていると考えられよう。

このようにqual, quinとも形態的には異なる点があるものの、統語的にはほぼ同じ振る舞いをすることから、これらの交替の可能性が予測できよう。また、カタロニア語の疑問代名詞・形容詞・副詞には、このquinのほかにqui, què, quant, on, com, quanがあるが、これらのうち少なくとも、qui, què, onは関係詞としても機能していることからの類推でquinを関係詞として流用することに抵抗が少なかったのではないかと考えられる。

結論として、quinの関係形容詞としての使用がスペイン語のcuyoの翻訳によるものであるとするにあたっては、統語構造においてのみ類推が働いていて、この点がスペイン語からの影響であると説明すべきであろう。つまり、[A + art N + de art qual(s)]の構文の煩雑さと補文標識としてのel qualの補文の文頭への移動の傾向が、cuyoからの類推にとって好都合であるからと説明できるのではないだろうか。また、語彙の選択、つまりqualとquinの交替は、カタロニア語内部の関係詞と疑問詞の混同によるものであり、これは常に定冠詞をともなうqualよりも、定冠詞のともなわなくてもよいquinを選択する際の、いわば使いやすさ、また関係詞と疑問詞の両方の機能をもつquiやquèの汎用性がquinの流用を容易にしていることなどが一因となっていると考えることができるのではないだろうか。

また、この誤用がよく見られた時期については、前世紀後半に本格化した文芸復興期や今世紀初頭があげられているが、現在の言語使用に限って言及する文法書にもなお誤用として述べられていることから、今日も書き言葉において使用されていると考えられるが、これについては実証的な検証が課題となつてこよう。

[続編に続く]

注：

- 1) また、これら3つの関係詞を複合関係代名詞に対して、単純形関係詞(*el relatiu simple*)とも呼んでいる。
- 2) *on*については、一般に関係副詞*el relatiu adverbial*と呼ばれる。cf.2.4.
- 3) *que*の次の語が母音で始まる場合には、これが強勢のあるなしに関わらず、飲み込まれてしまう。しかし、表記上は縮約されることはない。
- 4) cf. Cuenca(1991), p.83.
- 5) *qui*を制限用法で主格として用いることは古語法であると考えられ、避けるべきだとされている。この場合の*qui*は弱勢である：Doneu-ho a l'home qui vindrà ara mateix. (まもなくやってくる男にそれをあげなさい)。また、格言的な表現で、先行詞なしで主格として用いられる例も多い。
cf. Badia i Margarit(1995), p.361.
- 6) 例文(9)(10)は、Cuenca(1991), pp.83-84.から引用。
- 7) 例文(18)(19)は、Televisió de Catalunya(1995), p.121から引用。
- 8) 例文(20)は、Institut d'Estudis Catalans(1995), allòの項(p.83)から引用。
- 9) 例文(20)-(23)は、Badia i Margarit(1995), pp.374-375から引用。
- 10) 例文(24)は、Badia i Margarit(1975), II, p.262から引用。

参考文献

- Badia i Margarit, Antoni(1975) *Gramàtica catalana*. 2vols. Gredos.
- Badia i Margarit, Antoni(1995) *Gramàtica de la llengua catalana*. Edicions Proa.
- Baulenas, Lluís-Anton(1985) *Manual de llengua catalana*. GEA Edicions.
- Cuenca, Maria Josep(1991) *L'oració composta(II):la subordinació*. Universitat de València.
- Fabra, Pompeu(1937) *Les principals faltes de gramàtica*. Editorial Barcino.
- Fabra, Pompeu(1981) *Gramàtica catalana*. ed.Teide.
- Farràs, Neus et al.(1993) *Morfosintaxi comparada del català i el castellà*. Ed.Empúries.
- Institut d'Estudis Catalans(1995) *Diccionari de la llengua catalana*. Enciclopèdia catalana, S.A. i Edicions 62.
- Jordana, C.A.(1968) *El català i el castellà comparats*. Editorial Barcino.
- Martí i Castell, Joan(1986) *Llengua catalana*. Edhasa.
- Seguí i Trobat, Gabriel(1993) *Iniciació a la morfosintaxi catalana*. Edicions Documenta Balear.
- Solà, Joan(1972) *Estudis de sintaxi catalana/1*. Edicions 62.
- Televisió de Catalunya(1995) *El català a TV3 : Llibre d'estil*. Edicions 62.
- Valor, Enric(1983) *Temes de correcció lingüística*. Quaderns 3 i 4.
- Yates, Alan(1975) *Catalan*. (Teach Yourself Books) Hodder and Stoughton.

